

租界メディア班 第41回研究会

(2013年度 非文字資料研究センター 第3回公開研究会)

東アジアの租界・居留地とメディア

日時：2014年2月15日(土) 9:30～18:00

会場：神奈川大学横浜キャンパス 17号館 215室

開会挨拶：田上 繁 (非文字資料研究センター長)

趣旨説明：孫 安石 (非文字資料研究センター 研究員)

報告：①『東亜同文会資料中の租界関連情報』大里浩秋 (神奈川大学)

②『大連の歴史地図の作成について』木之内誠 (首都大学東京)

③『天津関係の絵はがきについて』近藤恒弘 (民間収集家)

④『絵葉書から読み解くハルビンと日本人—ハルビン絵葉書の社会的意味』毛利康秀 (日本大学)

⑤『従軍画家たちが描いた戦時中の上海—軍事郵便絵葉書による図版検証—』彭国躍 (神奈川大学)

⑥『上海人文歴史地図の制作構想について』蘇智良 (中国・上海師範大学)

⑦『租界と武漢の都市空間・機能の変容』李衛東 (中国・江漢大学)

⑧『横浜居留地の建築について』内田青蔵 (神奈川大学)

⑨『上海韓人の国際認識』金承郁 (韓国・ソウル市立大学)

⑩『ソウルの外国人居留地の形成について』金濟正 (韓国・ソウル市立大学)

コメンテーター：

栗原 純 (東京女子大学)、村井寛志 (神奈川大学)、中村みどり (早稲田大学)、石川照子 (大妻女子大学)

① 大里浩秋「東亜同文会資料中の租界関連情報」

大里は、まず「日本は日清戦争勝利後、台湾を植民地にするとともに、中国国内にいくつかの租界を置き、その後もさまざまな機会をとらえて、各種の特権を得た」とし、「日本がとったそうした動きはイギリスをはじめとする西欧列強の19世紀前半からの中国進出の仕方をまねたものだが、明治時代に中国との関係を重視する日本人は、西欧列強の中国進出は侵略的であるが、日本は違う、日本は中国と連帯して西欧列強の侵略からアジアを守るのだと考え、そのつもりでいろいろ実践したはずが、その行き着く先に満州事変、「満洲国」建国、日中戦争があり、1945年の敗戦があった」と、報告の前提となる状況認識を述べた。

その上で、戦後60年を経てなお本格的な租界研究が日本でなされていないことに気づき、この10年来数人の同僚とともに中国における旧日本租界および日本居留地について現地調査や資料調査を行ってきて、その実態について一定程度の理解を得ることが出来たが、まだ明らかにできていないところがたくさんあるとして、その

不十分さを補う作業の一環として、東亜同文会の機関誌を利用して、そこに記されている開設まもなくから11年間の中国数か所に置かれた日本租界に関する記事を読むことで、これまでの資料調査では気付かなかった実態を少しでも明らかにできればと述べた。

ここで本題に近づき、東亜同文会の前史および創立事情について、大里が数年来解題をつけながら読んでいる「宗方小太郎日記」、さらに「近衛篤磨日記」、創立直後に発行した機関誌『東亜時論』などを取り上げながら説明し、動機はさまざまであれ中国に強い関心を持つ人々



大里浩秋氏



の集まりである東亜同文会の機関誌（『東亜時論』1898年12月～99年12月、『東亜同文会報告』99年12月～1910年6月、『支那調査報告書』10年7月～11年12月、『支那』12年1月～45年1月）は、租界関係だけとはもちろん限らないとしても、関連する情報は豊富に載っているはずだと見当をつけて読み始めた。そして、上記のごとく46年間月2回、あるいは1回発行した機関誌中、初期の『東亜時論』と『東亜同文会報告』から関係しそうな記事を拾ってレジュメに並べつつ簡単なコメントをする形で話を進めた。ここでは、記事を1つ1つ取り上げる余裕はないので、2機関誌を通覧しての感想のみを紹介する。

『東亜時論』が発行された時期は、各地日本租界の開設直後ないし開設準備の時期と重なるので、その時期の各地在住日本人が現地で租界開設を待ち望んでいる様子や現地住民が開設に反発している様子などが伝わる内容になっており、外務省の公式文書では読めない内容で興味を引く。下関条約で開設を認めさせた租界中、その後の進展がない蘇州、杭州、沙市の現状を伝えるとともに、日本政府の対応の悪さを批判している。また、下関条約とは関係なく開設を目指して中国側と交渉している福州、厦門、營口の状況を伝えているが、そのうち繰り返して報じている福州については、その発展は見込めないと悲観的な論調である。

『東亜同文会報告』になると、他国の租界や租借地に関する動きが取り上げられるようになり、日本租界については、定着しつつある天津、漢口については現状報告を載せるものの、振るわない租界については載ることはまれである。通覧すると、当初の2年ほどは中国数か所に置いた支部の活動を通じて会の決議（中国の保全、中国の改善など）を中国内で広めようとしたかに見えるが、東亜同文会は維新派を支持して清朝を倒す側に回っているとの疑念に付きまといわれたこともあって、順調には事が運ばず、義和団事件や唐才常事件を経て、日露戦争の勝利をきっかけにして、大部分の日本租界が不振であることも幾分かは関係して、その不振を漢州でのさまざまな特権を挽回しようとしたと思わせるものがある。

今回は、以上2つの機関誌に触れただけの中間的報告に過ぎないので、今後はこれらに続く機関誌に目を通した上で、改めて報告することにしたい。

② 木之内誠「大連の歴史地図の作成について—制作作業の実際と現状を中心に」

木之内氏は『上海歴史ガイドマップ』（1999年、



木之内誠氏

2012年増補版、大修館書店）の著者として知られている方で、今回は、その姉妹編として制作中の大連の歴史地図について、その狙いや制作中の工夫などについて報告した。

まず、これは科研費を得たプロジェクト「旧満洲地域の都市歴史文化地図シリーズ第一分冊『大連・旅順編』の制作」として取り組んでいるもので、その研究計画としては「日・中・ロシア・朝鮮半島の人々の集合的記憶の重なりせめぎ合う場所大連、その多元重層的な文化の歴史的相貌を地図の上に可視化し、この地域に対してさまざまな学問的、あるいは実際的な関心を有する人々と共有しうる、多様な時空景観的情報のプラットフォームに一端を構築するというものである」と紹介された。

作業の実際としては、2010年以来実地調査を繰り返し行い、各種の文献や画像データを集め、大連に住んだことのある日本人にインタビューをして、予定地域の3分の2程度の作図が終わった段階である。建造時期の新旧によって、租借地時期以来の現存建造物、1945～1990年代半ば、改革開放期以後に3区分して色分けをする、坂の街大連の特徴を生かすべく地形の起伏を表現する、詳細でリアルな3D的ビジュアルと文字情報を読みやすさの調整などに心を砕いていると説明された。

他に、最近の調査で満鉄総裁星ヶ浦別邸や『聊齋志異』の訳者と知られる柴田天馬の住居を探し当てたとして、そのいきさつを楽しそうに紹介した。なお、木之内氏は前日の大雪で交通がストップしたため到着が大幅に遅れて最後の報告者となったが、予定時間を超過して熱弁を振るわれたのが印象に残った。

③ 近藤恒弘「天津関係の絵はがきについて」

近藤氏は、長年収集してこられた天津関係の諸資料（絵葉書、地図、写真集、案内書、回顧録その他）を、昨年（2013年）非文字資料研究センターに寄贈していただき



近藤恒弘氏



公開研究会の様子1

った。とくに絵葉書は、天津に日本租界を置いて数年後の1900年代初めのものから、日中戦争時期までのものまで、1000枚をゆうに超える数であり、近藤氏のご指導の下、絵葉書中に記された文字を中心にデータを入力して、今後の活用に役立てようと考えたが、まだ整理が満足のものにはなっていない。これからも近藤氏のアドバイスを得て、もっと見やすい形になるよう整理に努めて、皆さんに見ていただけるようにしたいと思う。

近藤氏の報告は、1929年に天津で生まれ、天津日本中学校4年の時に終戦となり、翌1946年に日本に引き上げたというご自分の紹介から始まった。その後中学の同級会を毎年開いてきて、2002年には天津で開こうという話になったという。その際、近藤氏が幹事になり、天津行きのガイドブックを作ろうと思いついて、天津に関わる資料を集めたのがきっかけで、その後12年間集めてきたものが相当数になった。そして、私たちのところに寄贈することを思い立ったのだという。

最初は天津と名のつくものを片っ端から集めたけれども、そのうち、とくに絵葉書についてはそれぞれの違いに気付くようになり、分類の仕方もわかってきた。そのための基礎になる知識としては、絵葉書の使用開始年が国によって異なり、日本の場合は1900年から使われたし、絵葉書に通信欄が設けられるのは、1907年であったということである。さらに、日本では当初通信欄は3分の1だったのが、18年からは2分の1になった。また絵葉書中の道路や建造物の状態によって年代を判断する事もできるし、発行所が用いた文字の色や図柄によっても年代の違いを知る事ができる等である。

天津に生まれ育ち、帰国後も天津に愛着を感じて資料を収集してこられた近藤氏に、天津理解の極意を伺ったことになる。(以上、大里浩秋記)

④ 毛利康秀「絵葉書から読み解くハルビンと日本人」

日本大学で構築したアジア歴史資料デジタルアーカイ



毛利康秀氏

ブ「ハルビン絵葉書」を利用して、戦前期のハルビンにおける日本人の観光について、メディア論の視点から報告が行われた。絵葉書の起源は1870年代のドイツに発するとされ、日本では1900年10月から絵葉書の使用が認められるようになり、解禁後ほどなくブームとなった。日本における絵葉書は、日露戦争の勝利を周知させる目的で発行されたものが人気を呼び、その収集熱が流行現象になったという。

写真絵葉書は、国際宣伝的な効果以外に、様々な出来事を報じるニュース媒体としての機能を持っていた。一方で、特定の差出人から特定の受取人へと情報が伝えられ、なおかつマス・メディアとしての画像情報に私信としての情報が付け加えられるという点において、パーソナル・メディアとしての機能をも備えていた。報告では、絵葉書の持つこうした側面は、現代人がカメラ付き携帯で撮った写真をメールで送信する「写メ」とも通じるものがあるとされた。

報告者の毛利氏は必ずしも歴史社会学、あるいはハルビン、満州に関心の重点を置いて研究してきたというわけではないということで、事象の掘り下げに課題も感じたが、一方で、絵葉書をメディアとして捉えるという視点は重要であり、ワークショップの中でも特色のある一本であった。



なお、本報告で扱われたデータの元となったという日本大学の「ハルビン絵葉書」のアーカイブはウェブ上で公開されている。「解説」によれば、同アーカイブは戦前期発行のハルビン関連の絵葉書 1177 件をデータベースとして登録したもので、絵葉書が包含する諸情報(被写体情報、記載文字情報、切手等の貼附資料情報、等々)が、戦前期および現在のハルビン市街地図情報にリンクさせたビューアから検索できるようになっている。同じく画像資料のデータベース構築を行っている本センターにとっても参考になると思われる。

⑤ 彭国躍「従軍画家たちが描いた戦時中の上海—軍事郵便絵葉書による図版検証—」



彭国躍氏

第二次世界大戦中、中国大陸や東南アジアに多くの従軍画家が送り込まれた。彭氏の報告は、氏がこれまで収集してきた軍事郵便絵葉書を手かかりに、戦後の非難と責任追及を経て、封印・忘却されてきた彼らの活動を明らかにする試みである。

報告では、各種資料との比較により、戦時中の従軍画家の作品の全貌を窺う上で軍事郵便絵葉書が持つ意味が示された。具体的な作品の分析に際しては、以下の3点の問題意識が提示された。①従軍活動の実態解明：どの画家が、いつ頃、上海に従軍していたのか、②図版内容の把握：画家たちは、どのような絵を描いていたのか、③表現意図の抽出：プロパガンダの要素と個人の創作意図がどう表現されていたのか。

こうした問題意識に基づき、51 点の作品について、画家 23 名の作品が作家ごとに整理され、更に、それらを(1) 日常風景(12 枚)、(2) 戦闘(15 枚)、(3) 戦跡(15 枚)、(4) 占領(9 枚)の4つの主題に分類し、考察が行われた。

従軍画家の作品について、戦時中から「戦争の生々しい現実を伝えるものではなく、大陸風景、戦跡の写生図の類であった」との評価があったが、本報告の考察によ



図1 小早川篤四郎「上海」(彭氏所蔵)

り、日中戦争の時に上海に従軍していた画家たちが、実際には長閑な日常風景や激しい戦闘、戦跡の記録図版など、多様な作品を描いていたことが示された。

いまだ十分に明らかにされているとはいえない従軍画家の活動やその作品について明らかにする上で、絵葉書という資料の持つ意義の大きさを教えてくれる報告であった。

⑥ 蘇智良「上海の歴史地図制作プロジェクトについて」

報告者の蘇氏は事情により来日できず、以下は報告原稿に基づいた紹介である。

現在、ある都市や地域の歴史地理学的な情報をウェブ上で再構築したアーカイブの作成が、世界的に流行となっているが、そのような試みが上海でも進行中であるという。

それは、上海の外環線以内の都心地域を対象として設定し、2009 年までに刊行された様々な出版物から上海の歴史に関連する情報を収集、検証、分類し、データベース化したものだという。その中間報告として、『上海都市人文地図集』(『上海歴史人文地図』?)が刊行され、最終的にはデジタル地図を公開する計画があるという。

その他にも、辛亥革命など、特定のテーマに焦点を当てた歴史地図や、著名人の旧居に関わる地図情報の整理、ハンガリー人の建築家ラズロ・ヒューデックの建築についての『上海鄒達克建築地図』作成の計画があるという(2013年に同済大学出版社から出版予定)。

上海の人文歴史情報を地図上に落とししていこうという試みは、すでにある程度蓄積が進んでいる。原稿中でも言及されていた、日本の木之内誠氏による『上海歴史ガイドマップ』や、フランスのクリスチャン・アンリオ氏を中心としたウェブ上のアーカイブ *Virtual Shanghai* 以外にも、上海故事会文化传媒有限公司・上海錦繡文章

出版社から出されている「上海的外国文化地図」シリーズ（日本、ユダヤ、フランス、ロシア、アメリカ、韓国、ドイツ、イギリス版が出版されている）などがある。これらの成果を踏まえつつ、上海におけるプロジェクトが独創的なものとして発展していくことが期待される。

（以上、村井寛志記）

⑦ 李衛東「租界と武漢の都市空間・機能の変遷」



李衛東氏

李氏の報告は、武漢における都市形成の誕生の様子から始まり、その自然発生的な歴史性に1861年以降の欧米列強の租界開設を契機に展開された近代化を受け入れる素地が存在していたこと、現在、華中地区の発展における武漢の役割がさらに重要性を帯びていることを指摘した。以下、概要を記す。

武漢の都市空間は歴史上「双城」から「三鎮」への変遷を辿ったといわれるという。3500年前の商の時代、武漢地区には早くも「盤龍城」とよばれた古代都市としての城市が出現していた。そこでは青銅器の軍事関連の文物も出土していることから、商王朝の南方における青銅文化の中心であり、統治の中心であったことが窺えるという。ここに拓かれた「盤龍城」の建設目的は、南方の少数民族の制圧と付近の豊富な鉱物資源の確保にあったと思われる。

一方、こうした高度な文化の発達した地域であったはずの「盤龍城」の歴史的記録は忽然と姿を消し、再び、武漢地域が歴史に登場することになるのは、東漢時代末期に「却月城」と「魯山城」が建立された時であったという。この軍事拠点としての2つの城郭都市の存在が、武漢を「双城」と呼ぶ所以である。戦乱のなかで建立された2つの城郭都市は、小規模ではあったが、軍事上の要塞（城郭）をなしていた。これは武漢一帯が政治、軍事、文化の中心になりつつあったことを意味していると考えられるという。

また、武漢に「双城」が形成された同じ時期には、一

種の「市」（市場、市街）という形態を備えた街も出現した。「南浦市」、「靈泉古市」などの城市が形成されたのち、明・清の時代になると、漢口に典型的な「市」（市場、市街）が大いに発展し、武漢は商・工業が繁栄した天下の四大鎮（朱仙、景德、仏山鎮、武漢）のひとつとして数えられていたのである。

前近代の武漢では、「城」は都市発展の中心であり、「市」の形成は計画的に建設されたというよりは、商業発展がもたらした結果ということができるという。そのため、明・清以来の商業的発展を背景に商業都市として成長した漢口は、「市」の発展から生まれた典型的な商業都市であり、漢口の発展は政治的な意図とはまったく無関係なものであったという。そうした独自の内的発展を遂げた商業都市としての漢口は、1861年の開港という新時代に対しても適応できる能力を十分備えていたという。

1861年の武漢の対外開放以降、西欧列強は相次いで租界を創設した。こうした西欧列強による租界の設立は、武漢の社会、政治、経済、文化などあらゆる方面に劇的な変化をもたらし、その結果、武漢の都市空間は急激な変貌を遂げることになった。すなわち、租界設立の以前、漢口は河（漢水）に面した都市であったが、租界の設立によって大型の船舶が行き来する長江沿いの開発が急激に進み、租界が置かれた長江が急激な発展を成し遂げたのである。この租界地区に新たに開発された都市は、伝統的な中国社会における都市発展とはまったく異なるものであったし、租界地区の発展により旧市街地の商業発展は急速に衰え、また、没落することになった。いずれにせよ、開港と租界の設立は、まさに武漢を国際的な都市へと発展させ、交通と通信技術は武漢の地理空間をも大きく変えた。すなわち、租界は、武漢を世界へとつなぐ役割を果たしたのである。その結果、中国の内陸の都市でしかなかった武漢は、国際都市へと大転換を成し遂げ、国内貿易を中心とした産業構造から今や世界を舞台にした国際的な貿易都市へと成長できた。すなわち、領事機構、外国人の商社（洋行）、税関機能を併せ持つ租界を、新しい都市の発展モデルとし、武漢は急速に近代化を進めることができたのである。その意味で、武漢の近代化は、租界によってもたらされたともいえる。そして、現在、長江中流地区における武漢の役割はもちろんのこと、華中地区全体の発展を牽引する都市としての役割が益々強く求められているのである。



⑧ 内田青蔵「横浜居留地の建築について—日本大通りに見られる官庁建築の集中化について—」



内田青蔵氏

内田報告は、2013年12月の研究会における発表内容を基に、官庁建築の集中化の動きを中心に紹介したものであった。その内容は、研究会報告に譲ることとする。
(以上、内田青蔵記)



公開研究会の様子2

⑨ 金承郁「上海韓人の国際認識」



金承郁氏

金氏の報告は、従来の上海朝鮮人研究が、主に上海の韓国臨時政府を中心とした独立運動の研究であったという反省から、韓国人が移住したその他の地域との比較検討を提案し、また、当時、上海に滞在していた朝鮮人がどのような国際認識をもっていたのか、を紹介するもの

であった。

その分析によれば、19世紀の後半から1930年代に至るまでの、いわゆる初期の韓国人の移民の主導権は、韓国の独立運動家が握っていたが、その居住空間と1930年代の虹口を中心とする韓国人の居住空間は全く異質的なものであったという。そして、この初期の韓国人居住者は、朝鮮半島から上海へ渡航するという直接ルートではなく、その多くが中国の東北地域を経由する迂回路を辿っていたことを指摘した。この初期の上海滞在を経験した韓国人の人々の国際認識は、当時の朝鮮で発行された雑誌『開闢』、『三千里』などに紹介されており、その中の一部は、(1) 国際都市上海を世界の縮図として理解し、(2) 国際情勢の変化に韓国人が積極的に対応していかなければならない、という認識が表明されていることを紹介している。

また、帝国主義列強の侵略と競争という構図の中で、上海が経験する社会文化現象は、中国だけではなく、東アジア諸国にも影響を及ぼす重要な経験になる、という意見が当時から提示されていたと話す。当時の韓国人は、上海が光明の都市であると同時に、暗黒の都市であるという両面性をもっていたことにも触れ、たとえば、フランス租界で開催されたフランス革命記念日の本質は、自由、平等、博愛を声高に叫びながら、その一方で中国人を騙して巨額の富をなし、豪遊するフランス人がいることを忘れてはならないとも指摘している。

⑩ 金濟正「ソウルの外国人居留地の形成について」



金濟正氏

金濟正氏の報告は、朝鮮王朝末期から1945年にいたるまでのソウルの政治と権力の中心が、どのような歴史的変遷を辿ったのかを後付けしたものであった。それによれば、欧米との外交接触を始めた朝鮮時代の後期(1880年代)には多くの外国公館が設置された貞洞こそが政治の中心であった。ところが、1890年代に入ると、朝鮮における利権の獲得に乗り出した日本の攻勢を



栗原純氏



孫安石氏



村井寛志氏



中村みどり氏



石川照子氏

かわすために、朝鮮政府がロシア側に庇護を求めたことで、政治の中心はロシア大使館へと移動した（韓国では「俄館播遷」といわれる）。その後、1906年に日本と朝

鮮王朝との間でいわゆる統監府が設置されることにより、日本人居留地が多く居住する南山が権力の中心として浮上した。ところが、1910年に日本が朝鮮を植民地として併合したことから、朝鮮総督府は植民地の民衆に圧倒的な力の差を見せびらかすためにより大きな建築物を建造する必要性に迫られることになる。ここで登場したのが、朝鮮総督府の新築計画であり、最終的には朝鮮王朝の王宮が位置した景福宮の一部が朝鮮総督府の庁舎として当てられ、1926年にはその完成をみるようになった。

このようなソウルの事例を、アジアと世界の植民都市と比べてときに、1つ興味深い事実を発見できる。すなわち、世界的な規模で展開された植民都市は多くの場合、「土着と外来」、「伝統と近代」という2つのシンボルを対比するために新しい都市を建設する場合が多かったが、日本の場合は、台北の台湾総督府にしても、ソウルの朝鮮総督府にしても、日本人居留民が多く居住する街の中心に権力と政治の中心を設置したという。台北の場合、台湾総督府の関連建築物の多くがいま現在でも権力の中心として機能しているのとは対照的に、ソウルの場合は最終的に撤去される歴史的な経緯を辿ったが、この「撤去」という意味からみれば、ソウルの事例が特殊なのかも知れない。

この2つの報告を聞いて私が感じたことは、これらの報告が都市の「空間」を問題視し、都市がどのような機能を担ったのかについて問題関心を設定していたという点であった。これは2人の報告者が所属したソウル市立大学が「都市人文学」（ニューズレター「非文字資料研究」No.31、2014年1月31日刊行の第1回アジア都市フォーラム「アジア都市研究：回顧と展望」を参照）の創出を目指す試みが反映されていると同時に、これらの成果に「時間」という座標軸をクロスさせるといった新たな研究手法を模索する試みであることも強く印象づけるものであった。（以上、孫安石記）